



学校事例 7

四国地区

香川県 高松市立栗林小学校

教師、保護者、
地域が一体となり
子どもの成長を支える

どんな大人になってほしいか



- 自分の住む地域を愛し、誇りに思える人
- 「自分だって、やれば出来る」と思える人
- 自分の意見をしっかりと持ち、他者の意見にも耳を傾けられる人
- 公共心を持った人

そのための小学校の役割



- 地域の子どもを見る目と声を謙虚に受け止めながら、多くの人との交流を通して、子どもの主体性とかかわる力を育成すること
- 保護者や地域の人々が学校にかかわる機会を積極的に設け、教師、保護者、地域が一体となって子どもを育てること

未来に残したい 栗林小学校の力強さ

- ◎地域、保護者と共に子どもを育て、学校を支えていこうとする姿勢
- ◎言語活動を取り入れた授業づくりや心の教育など、全員が学校教育目標の達成にかかわり、学年団を横糸、プロジェクトを縦糸として、一体となって教育活動に取り組む



高松市立栗林小学校
真鍋長嗣
Manabe Takeshi

現職教育主任、3学年担任。「他者の意見に真摯に耳を傾け、自分の意見を鍛えられる大人になってほしい」



高松市立栗林小学校
佐藤盛子
Sato Moriko

道徳主任、1学年担任。「努力すれば出来る、自分にだって出来る」。心からそう信じられる子どもを育てたい」



高松市立栗林小学校
三木省二
Mita Syoji

学校評価担当、5学年担任。「栗林地区に限らず、自分の住む地域を愛せる大人になってほしい」



高松市立栗林小学校校長
藤本泰雄
Fujimoto Yasuo

「子どもの生き生きとした姿を、家庭にも地域にも伝えられる学校をつくっていきたい」

School Data

設立	1884(明治17)年
校長	藤本泰雄先生
児童数	1193人
学級数	39学級(うち特別支援学級5)
所在地	〒760-0073 香川県高松市栗林町2-10-7
TEL	087-861-3438
URL	http://www.edu-tens.net/syoHP/riturinHP/
公開研究会	未定



六つのプロジェクトにより「主体性」と「かかわる力」を育成

高松市立栗林つりりん小学校は、児童数1000人を超える大規模校だ。かつてはこの地域に長く住む家庭の子どもが大半だったが、最近は保護者の転勤などで引越してきた家庭の子どもが増えている。それでも、学校に強い関心を寄せる地域性は変わらないという。運動会には、保護者だけでなく地域の人も参加するほどだ。

同校の子どもは、学力は比較的安定しているが、自分の考えを発表したり、自ら進んで行動したりする積極性に乏しいところがあった。また、友だちに対する気配りに欠ける行動が見られることも課題だった。

こうした課題を改善しようと、2年前から教師全員で検討を重ね、2011年度は学校教育目標を「よく学び よく遊び よく働く子どもを育てる」とし、「自主・思いやり・夢 チャレンジ」をスローガンに掲げた。藤本泰雄校長は、子どもに主体性と他者とかかわる力を付けたいと話す。

「将来、困難な状況に置かれることがあっても、周りの人と力を合わせながら、くじけずに全力を尽くせる人になってほしいと思います。大規模校のメリットを生かしながら、子どもの自主性を育て、他者とかかわる力を高めたいと考えました」

重点目標を踏まえ、①学力向上、②心の教育、

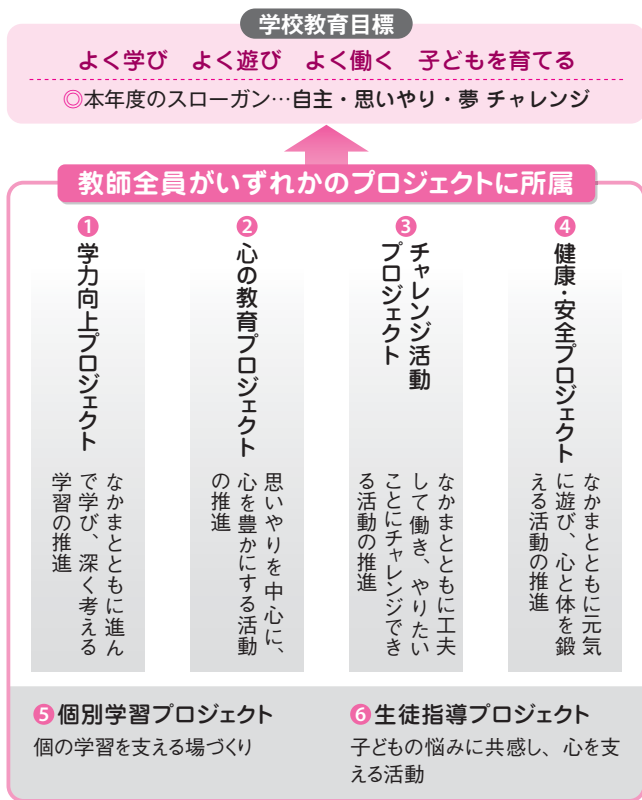
③チャレンジ活動、④健康・安全、⑤個別学習、⑥生徒指導の六つのプロジェクト部会を新設し、どの教師もいずれかのプロジェクトに所属する形にした(図)。一つの部会は10人ほどから成る。部会は月1回とし、どの教師も勤務時間内に無理なく参加できるように、校内研修の年間計画に組み入れた。どの部会にも全学年の教師が所属するようにしたため、各部会で話し合った内容は毎週の学年会議でも共有できる。

学校評価担当で5学年担当の三木省二先生は、全員で取り組む体制について次のように話す。

「六つのプロジェクトの内容は、以前から各学年で大切にしてきた活動ばかりですが、それを学校教育目標とスローガンに沿って改めて位置付けること

によって、学校全体としての取り組みにしていこうと考えました。学年団を横糸、プロジェクトを縦糸として、先生方全員の意識を一つにまとめ上げられればと考えたのです」

図 学校教育目標、重点目標と六つのプロジェクトとの関係



何人もの教師がアイデアを出し 言語活動の質を高める工夫を重ねる

プロジェクト元年である11年度は、六つのうち二つに重点を置く。一つめは、①学力向上プロジェクトだ。新学習指導要領の全面実施に伴い、全学年で言語活動を取り入れた授業づくりを始めた。言語活動が主体性やかかわる力の育成に適しているという部会の判断もあった。

10年度の反省ではどの学年の教師からも、「自分の考えを言えない子どもがいる」という声が上がった。検討の結果、「言語スキルの時間」を全学年で設けることに決めた。これは言語活動を進める土台となる力を付けるための時間

学校教育目標と重点目標を踏まえ、従来から取り組んできた教育活動を再編。それぞれの活動に特化したプロジェクト部会を設けた。個別学習プロジェクトと生徒指導プロジェクトは、全ての教育活動の基盤という意味を込めて他四つのプロジェクトの下部に位置付けている *同校の資料を基に編集部で作成

で、朝学習の時間のうち第4週・第5週の火曜日・金曜日を充てる。活動内容はあえて統一せず、担任がそれぞれ自由に決めることにした。

現職教育主任で3学年担任の真鍋長嗣先生は、その理由を次のように話す。

「活動内容は、担任がそれぞれ、目の前の子どもの実態に合わせて工夫しています。私の学級では、友だちの意見と自分の意見とがどう違うのか、どこが違うのかを判断できない様子が見られました。そこで、テーマが似通った課題文のプリントを二つ用意し、筆者の考えを比べさせています。また、この時間で見えてきた各学級の課題などは、学年会や部会で共有しています。これらによって、教師も一人ひとりが主体的に取り組みやすくなり、他の教師への刺激にもつながります」

6月には、3年、5年、6年の一学級ずつで一斉に国語の研究授業を行った。他者とかかわることを通して主体性を育てようというねらいだが、子どもが二人一組で話し合う学年、4〜5人のグループ内で話し合う学年、教師と子どもとの対話を中心の学年というように、活動の仕方には違いが見られた。

「他学年の授業を見ることで、発達段階に応じて活動内容や形式をどう工夫すればよいか分かります。国語以外の教科に言語活動をどう取り入れるかを考える上で役立ちます。また、他学年の教師からもアドバイスを得られたり、

授業を見た学年の児童に声を掛けやすくなったりするという効果もあります」(真鍋先生)

他者への感謝の気持ちを素直に表現できるように

重点プロジェクトの二つめは、②心の教育だ。他者への思いやりを育もうと、「栗っ子ありがとうの日」を設けた。これは、児童会の子どものための考えを基に、心の教育部会が設定したテーマに沿って、毎日の生活で感じた友だちの良いところや家族のありがたさなどを発表する活動だ。どの学年も、道徳の時間を核とした指導計画の中で月1回行う。5月には、地域の人も参加して行われる運動会の感想文を書いた。感想文は各学年から数点ずつを選んで廊下に掲示し、子どもが友だちの書いた内容を読めるようにした。

道徳主任で1学年担任の佐藤盛子先生は、そのねらいを次のように話す。

「運動会では地域の人と普段よりも身近に接することが出来ます。そうしたかわりを通して自分が多くの人に支えられていることを実感するでしょう。でも、なかなか自分の気持ちを表に出せないのは、照れくささが邪魔をしているからに過ぎません。素直に感謝の気持ちを表わった文章を掲示することで、自分の気持ちを伝えることを恥ずかしく思わない雰囲気をつくらうと考えたのです」

感想文には、「近所のおじいちゃんと一緒に踊ってくれて楽しかった」(1年生)、「大きな音量で流れる音楽は僕たちには楽しいけれど、近所の人にとってはうるさく感じられるはず。それでも温かく見守ってくれることに『ありがとう』と言いたいです」(5年生)など、いずれにも地域に対する感謝が表れていた。

大人との多様な交流を通じて社会を見る目を鍛える

現在、栗林小学校は教師、保護者、地域が一体となって子どもを見取る環境を整えようとしている。例えば、感想文の掲示にも、来校する保護者にも子どもの感想をたくさん読んでもらおうというねらいがある。保護者が子どもの成長を感じる働き掛けを、意識的に行ってきた。

学校に強い関心を寄せる保護者が多いのは、そうした積み重ねの成果と言えるだろう。朝の全校集会を見学してから出勤する父親の姿が見られたり、平日にもかかわらず水泳クラスマツチ(写真)にあふれるほどの参観者が集まったりするほどだ。

保護者会や懇談会などでは、多くの保護者が学校と家庭との役割分担を意識して、発言や提言をするという。

「地域と本校の連携については『こういう取り組みは出来ないだろうか』という意見をいただきます。生活習慣に関しては『家庭で出来る



写真 学年ごとの水泳クラスマッチにはたくさんの保護者が参観に訪れ、「共に力を合わせる仲間に出会えて、子どもは幸福だと思ふ」など、自分の子どもだけでなく子どもの友だちが頑張る姿を見て感動したという声が寄せられた

ことはないか』と協力の提案をいただきます。教師と保護者とが一緒に教育活動を考える伝統が出来ているのです」(三木先生)

同校は、国の特別名勝である栗林公園での始業式や観光ガイドのボランティアなど、地域と連携したさまざまな取り組みも行っている。

「地域の活動は、社会人や高齢者など、保護者以外の大人とのかかわりがおのずと生まれます。そこでの協働的な活動や交流を通して、子どもは地域についての探究活動を深めます。教科学習で身に付けた知識を活用する良い機会に

もなると考えています。大人の賢さや優しさに触れ、憧れの気持ちを持つこともあるからです」(三木先生)

学校運営についても地域の声を取り入れようと、子ども会会長や元PTA会長、体育協会会長などで編成される地域学校連携推進委員会を設けている。10年度から始めた「マラソン期間」は、子どもの体力低下を心配する同委員会の声に応えたものだ。



育てたい大人像と
そのための小学校の役割
公共心を育むため
多くの人とのかかわりを

10年後、20年後、社会に出ていく子どもたちをどのような姿に育てたいかを、先生方に聞いた。
三木先生は、地域を愛する大人になっ
てほしいと話す。
「地域は生活の基盤

となります。今、住んでいる栗林地区のことだけでなく、将来、どこに住むことになっても、近隣の人と力を合わせて、その地域のために尽くそうとしてほしいと思います」

佐藤先生は、自らの課題を一つひとつ乗り越えていける強い意志を持った大人に育ってほしいと話す。

「何ごとにも諦めずに根気よく取り組む気持ちを支えるのは、『やれば出来る』という信念です。自分を信じられなければ、何も始まりま

せん。自尊心があるからこそ、他者への思いやりも生まれるのだと思います」

真鍋先生は、自分の考えを持つことが大切だと話す。

「社会に出れば、さまざまな考え方の人に出会います。他者の意見に耳を傾けることは重要ですが、子どもにはその前にまず、自分はどう考えるかをしっかり固めてほしいと思います。話し合いでも討論でも、根本はそこにあるのではないのでしょうか」

藤本校長は、相手を気遣うことと責任感の育成が大切だと言う。

「人間は自分一人で生きているわけではありません。だからこそ、周りの人に対して気を配ったり、所属する集団の中の義務を果たしたり出来る、いわば公共心を備えた大人に育てたいと思います」

そうした大人を育てるために必要なことを、藤本校長は次のように話す。

「地域の方は率直な意見を寄せてくださいます。授業参観では、『あの場面では、子どもの答えに教師がもう少し反応しても良かったのではないか』といった教科指導の課題も指摘されます。いつも受け入れるわけにはいきませんが、教師の視点に偏らない指導を追究する上で、とてもありがたいことです。私たち教師は、地域の子どもを見る目と声を謙虚に受け止めながら、多くの人とのかかわりを通して子どもたちを育てていきたいと思えます」